The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語の発想内容と場の問題
Author(s)	塚原, 鉄雄
Citation	語文. 1951, 4, p. 32-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68389
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語の発想内容と場の問題

塚原鉄雄

我々は、音声若くは文字を通じて、それに該当する聴覚映像を喚起し、相手の意図する素材を理解する。これが、言語行為に際してなされる、言語受容者（読者・聞き手）の心的過程の概略である。従って、表現者の意図する素材を理解させた場合に、言語の使命は一応完了したと考へてよい。その限りでは、「喚起さるべき心的現象の内容の表象を以て意味とする」といったやうな意見[1]も、傾聴すべきものがある。即ち、それは、素材としての心的内容の何であるかを理解することが、言語の意味を知ることであるとする考へ方である。確かに、従来の意味研究の課題は、とりてもなほさず、表象概念の研究であった。従って、意味の変遷といふことも、例へば、「つま」といふ語は、昔は、男の配偶者も女の配偶者も共に指したのだが、現在では、特別な場合を除いて、普通女のみをいふやうになったとか、古くは一部の限られた階級にしか用ゐられなかった「奥様」が、広く人の妻女に対していはれるやうになったとか、或いはまた、箱のことであった「カメラ」が、写真機を意味するやうになったとか、いふふうに、表象若くは概念の、拡張・縮少及び転換[2]の検討・究明に外ならなかった。

しかし、今日これを検討するならば、時枝誠記博士も夙に説かれてゐることであるがそれは言語の表現する素材の探求にとどまるのであって、言語の意味の研究であったか否かは、極めて疑はしい。むしろ、それは、言語によって志向せられた対象であって、直ちにこれを意味とすることは出来ないと思はれる。意味といふ語を用ゐるとすれば、意味的志向対象であって、意味そのものではない。それは、言語を通じて喚起せられる、発想内容の一つなのである。

大別して、言語には、二つの発想的部面がある。一は、いまここに触れた、言語が指示するところの素材となる対象（A）であって、普通、用を辨じ、事物を語り、事物が何であるかを知らせる部面である。他の一つは、言語に対する言語主体の意識であって、はずみをつけ、情趣を与へるところの言語感覚（B）である。後者は、更に、感官の種類に従って類型化することが出来るが、その主要なものとして、聴覚的部面（b_1）と視覚的部面（b_2）とに分析することが出来る。前者は、対象それ自体（a_1）と、対象に属し（a_2）又は対象によって触発せられる（a_3）状態的乃至情意的世界に分けて考へられる。

而も、素材となる対象と言語感覚との関係は、必ずしも恒常性を保ってゐるといへないのであって、具体的な言語行為に際して、

その重点の位置は、常に移動してゐる。

ダダイムがの創始者で且つ指導者であったトリスタン・ツアラが、一九三〇年前後の數年間に亘って残したといふ、

○固い愛撫が休息する石

○石の面に投げつけられた夜

○衝突するガラスが不断にざわつく純粋な額

などの、特異な表現は、言語が具備する視覚的感覚世界の効果を、極度に発揮してゐるものといへよう。怪奇極まる狂乱的なこのイメジの世界は、語が文に超越することによって、妖しくも咲き薫るのではあるけれども、突如、蒼天の彼方から飛来したとは考へられない。詩が言語を媒介とし、言語が社会的共有物である以上、やはり、個々の語に内在してゐたに違ひないのである。少くとも、そのやうな世界を構成し得る条件を、一つの可能性として、備へてゐることは、否定出来ない。平生は眠らされてゐたイメジの世界が、一人の天才によって、覚醒せられ、具象化せられたのである。

夏目漱石は、夢十夜の中で、運慶が彫刻するのは、眉や鼻を鑿で作るのではなくて、木の中に埋まってゐる眉や鼻を、鑿と槌の力で掘り出すのだといふことを聞いて、積んである樫の薪を片っ端から彫ってみたが、どれも仁王を蔵してゐるのはなかったといふ話を書いてゐる。詩人は神ではない。無から有を創造するのではなくて、平凡な一般人には発見し得なかったイメジを、鮮かに発掘するのである。従って、普段は、殆んど注意せられないで、欲如してゐるかと思はれる世界も、深く、言語生活の中に沈潜して、子細に検討してみるとき、実は、意識的に自覚せられてゐない、いはば、未発見・未覚醒の状態にあるに過ぎないことに気が付くのである。我々が、少し慎重に反省するならば、この零囲気がその周囲に揺曳して、言語に、色彩と陰影とを与へてゐる事実を理解するであらう。

言語は――それが一つの単語であれ、或いは一つの文であれ、将又、一篇の小説であれ、一冊の著述であれ、――単純と複雑との差はあるにしても、常に、このやうな零囲気に囲繞せられて活動してゐる。勿論、これらは、単に、個別的に羅列してゐるのではない。また、それらは、何れもが、等値的関係で共存してゐるのでもない。個々の言語によって、それらの間には、軽重濃淡の程度差は十分に窺はれるし、個人及び社会の、歴史的若くは地理的、位相的相異に従って、その相貌を常に変へるのである。而も、これらは、綜合的に一つの零囲気を形成するけれども、その変化に方っては、各々が独自の進路を辿るので、その変貌を逆観することは不可能である。と、同時に、一応、右に試みた言語の発想的部面に対する分析が、必要な理由も、また、ここにある。

扨て、言語が指示する対象であるが、これは、普通に意味と考へられてゐるものである。嘗て、わたくしは、その指示する対象の転換に気付かないで、而も、意味が通ずるところから、誤った理解をなすに至った例として、「つら」及びその複合語に就いて記したことがある。(四)「つら」といふのは、傍を指す語であって、人体でいへば、頬のことであった。それが、近世には、面（おもて）をいふやうになり、それでも殆ど矛盾しないところから、国学者達が、顔とか表面とかに誤解して、その結果、近年に至るまで、その弊を継承してゐたのである。

通常、意味変化として説かれるのは、殆ど皆、この項に属するから、再に、贅言を要しないであらう。

対象によって触発せられる状態的乃至情意的世界の例としては、「若草」といふ語を材料として、その展開の姿を、実証的に観察したことがある。(五)「若草」といふことばは、その対象とする素材そのものに関する限り、古来、殆どその差異を認め難い。しかしながら、言語行為者としての主体が、この語において、何を感得し、何を把握したかといふことになると、時代的に、著しい差異を見出すのである。即ち、同じやうに「若草のつま」といふ場合でも、古くは、二つ相対するものとしてかかってゐるのに、稍々時代が降ると、対女性的なニュアンスの下に、柔かくうひうひしくも愛らしいものとして把握せられてゐる。王朝時代になると、直接、若い女性と結びつくが、やがて、中世に至ると共に、主観的恋愛感情は払拭せられて、自然の景物としてのみ考へられるが、上代におけるやうな、単なる双葉といふのではなくて、繁茂の概念と結合して、繁栄を予想するに至る。これは、言語の志向対象そのものは、概ね、不変であるのに、そこから触発せられる世界が推移して行ったものである。

対象それ自体に属する状態的乃至情意的世界を意味するものとしては、次のやうな場合によくわかる。即ち、「接吻」といふ語を、西欧文学作品、例へば、グリムの童話で、毒林檎を口にして息絶えた白雪姫に対する若い王子の行為に見る場合と、所謂カストリ雑誌の紙上に蠕動するアプレ男女の生態として見出した場合との心理的反応の、如何にも著しい差異を比較してみれば、同じ語によって表現せられた、同じやうなこの形式は、決して同一内容ではなくて、夫々違った意味をもつこととなって来るのである。

「彼奴は犬だ」といったいひ方は、「犬」といふ語の志向する対象の属性が、彼奴によって志向せられる対象の属性と共通するところから、即ち、両者の属性を媒介として「彼奴＝犬」といふ式が成立した結果、可能となるのである。これを、「犬は脊椎動物である。」といふ表現における「犬」と比較するならば、後者においては、その肉体構造の形式が強調せられ、前者では、その属性が前面に押し出されてゐるといへよう。「犬」といふ語の志向対象である動物は、ここに、少くとも、二つの内容を、可能性として、内包してゐたことを明かにしたわけである。我々は、「犬」といふ語において、この動物が持ってゐる無数の内容を、未だ実現せられてゐない可能性として、予想することが出来る。従って、未分析未覚醒の状態において、全体的に把握するのである。

この動物の特質の発見が、このやうな、二つの異った、所謂多義性を作り出すのであるが、これは、多義性と呼ばれることによって予想せられるやうな、意味の分裂を意味するのではない。この語の意味とは、そのやうに分岐し得る無限の可能性の統一である。所謂多義性における個々の意義とは、言語の志向する対象としての素材における世界の多様性を指すのであって、本来、無限に指摘し得るものなのである。

今後起るかも知れない新たな〃朝鮮〃に対処する手段として……

このやうな表現における「朝鮮」といふ語に含まれた内容を考へるとき、

マ元帥が今後起るかも知れない新たな〃朝鮮〃に対処する手段として極東地域に少くとも米軍四個師、恐らくはこれ以上の部隊を存置することを……（アサヒニュース二一五号）

とあって、初めて固定し得るので、これを、例へば、東学党の事件を敍した部分として見たら、共産党側の報導と考へたり、いろいろの場合として、夫々含むところが、無限に変化することがわかるであらう。それを、一つ一つ、「朝鮮」といふ語の意味とは考へられない。朝鮮の状態の推移するに伴って、この語によって喚起せられる発想内容も、また、移動するのである。

次に、言語に対する主体的感覚について触れる。その最も明白な例は、擬態語、擬声語など、所謂象徴辞の類であるが、「チラチラ」「キラキラ」などといった視覚的なもの、「ガンガン」「バカバカ」などの聴覚的なもの、「シッポリ」「ネットリ」など触覚的なもの、「プーン」などの嗅覚的なもの、「ビーン」などといった所謂第六感に属するもの、といった具合に、枚挙に暇がない位である。

これらは、語が志向する対象としての素材がさうであるばかりでなく、音声そのものとして、以上のやうな刺戟を与へることに注意したい。例へば、「ガチャンと窓ガラスが破れた。」といふ場合に、「ガチャン」といふ語によって志向せられる対象は、純然たる音響としての「ガチャン」である。聞手（若くは読み手）は、「ガチャン」といふ語を通じて、その音響を想起すると共に、「ガチャン」といふ音声の連合からも、窓ガラスが粉粉するに相応しい感じを受ける。或いは、「水がポトポト落ちる。」といへば、水滴が間歇的に落下する状態を音響象徴によって表現してゐるわけであるが、同時に、破裂音の連続は、聴覚的な間歇の世界をも齎すのである。

これらは、恰かも、歌麿の描く女の曲線から、肉の軟かさ、その肌の滑らかさばかりでなく、その汗腺や脂腺の分泌物から発散する強烈な体臭を感じたり（高橋誠一郎氏）、薬師寺の三尊に触覚的な美しさを眼に見る（和辻哲郎博士）といふふうに、[六] 感覚器官相互の有機的連関性からして、必ずしも、厳密には分析出来ないで、綜合的感覚を有するものがある。しかし、その中の、何れが、より強調せられてゐるかといふことはいへる。更に、これは、状態性のものと、情意性のもの、及び両者に跨るものとに分類することが出来る。

一般語に対する言語感覚も、人間の感覚機能に応じて、類別することが出来る。「酢」だとか辛子とかいった語は、古代には、恐らく新鮮な感覚的反応を惹起したものであらうと思はれる。勿論、単に、語についてのみいふのではない。一首の歌、一篇の詩が刺戟する、全体的な世界こそ、究極の課題とすべきものである。例へば、草野心平の「蛙」の詩には、「蛙のやうなぬるぬるした匂ひが」あるといふように——[七]。

ただ、現代において、最も顕著なのは、聴覚的語感と、視覚的のそれとであろう。「恋愛名歌集」において、萩原朔太郎が、

あらざらむこの世の外の思ひ出に今一度の逢ふこともがな
（和泉式部）

に対して、「即興詩人のアヌンチヤタか？　哀傷肺腑を突く者がある。」と激賞し、且つ、この歌、声調朗々として愛吟に耐へるとして、「けだしAとOとの開唇母音を重韻にし、中間にIの閉唇母音を挿んで調を構成してゐるからだ。」といひ、「重韻の外、上句初頭のAと下句初頭のIとが、同じ母音の陰陽で対比してゐる点を見るべきである。」と説いてゐるのは、[八] 前者の例であり、「詩と詩論」以後の現代詩が、特に強調し追求するイメージは、後者の主知的発掘の一例とすることが出来よう。

尤も、これら感覚の内容については、言語行為者の主体的意識に立ち戻って、慎重な検討を経るのでなければならない。

小竹の葉はみ山も清に乱友吾は妹思ふ別れ来ぬれば（万葉集2一三三）

この歌の第三句「乱友」の訓については、現在なほ議論の多いところであって、俄かに断定することは困難であるけれども、相異った訓を主張せられる二人の学者、沢瀉久孝先生(九)と亀井孝氏(一〇)とが、夫々聴覚的世界、視覚的状景といった、別の場面を心に描いて居られることは、興味ある問題を提供するものといへよう。

各項目について、以上、具体的に、簡単な解説を試みたわけである。その一つ一つは、更に、詳細に分析することが出来るであらうが、ここでは、その大綱を示すに止める。固より、シャルル・バイイが慎重に述べてゐるやうに、言語研究の結果定立せられた部類や法則は、固定した実在体ではなくて、常に、中間地帯が存在する。「……であればある程それだけ」といふ準則は、この場合にも、やはり、適用せられなくてはならない。この方法上の準則を無視して類型を設けることは、生成躍動する言語を、一個の化石として取扱ふに過ぎないからである。その意味で、これらの分析的類型は、広漠たる中間地帯を擁する発想内容の、異色ある辺境を、クローズ・アップしたものといへよう。

問題の性質を単純にするために、これからは、語に限定して考へることにする。

時枝博士によれば、言語の意味とは、素材に対する言語主体の把握の仕方である。語は同一事物に対する把握の仕方の相違を表現することによって異った語となり、逆にまた、指すさまが同じであるならば、異った事物をも同じ語によって表現されるわけである。(一一)

ところで、かやうなことが可能なためには、前者においては、異った把握の仕方を許容する事物の多面性、後者においては、異ったものをも同一の仕方で把握出来る言語の包容性――事物に即していへば、同一の仕方で把握し得る事物間の共通性、が、前提せられなくてはならない。これを決定するものが、ここに述べた、言語の発想的部面であると考へるのである。

一つの言語社会において、一つの語に対する発想内容は、言語そのものの性質上、概ね一致してゐる。それは一種の社会的制約として個人を規制する。反面、この発想内容は個性的特色を備へてゐる。感受性の異性に鋭敏な詩人や音楽家に顕著に見られる「色聴」（Audition colorée; Farbenhören）と呼ばれる現象は、その最も極端なものの一つといへようが、実際には、社会的規則と個人的特性との止揚の上に、当該社会における彼の言語活動は営まれると考へられる。而るに、一人の人間が所属する言語社会は、決して単一ではない。数多くの重層的言語社会の中に、彼の言語体系は、幾重にも包まれてゐるのである。このやうに複雑極まる発想内容を規定して、最も適当なものを表面に押し出すのである。

何がこの機能を果す原動力をなすのであらうか。言語表現者とこれに対立するものとしての言語受容者との関係、換言すれば、言語行為者の位置する場が、これを決定づける。逆にまた、この発想内容が、場を形成し、変貌させるのである。

ここにいふ場とは、話手と聞手、言語表現者と言語受容者との緊張関係である。時枝博士の説かれる場面は、「聴手をも含めて、その周囲の一切の志向的対象となるものを含むものである。例へば、

我々が厳粛な席上で一人の友人と相対する時と、他の寛いだ席上で相対する時とは、聴手は同じでも、言語的場面としては著しく相違してゐると考へなければならない」[一三]といふふうに述べられるのであるが、この友人は、人物としては同人ではあっても、聴手としては全く別人であると考へるべきではあるまいか。言語表現は、常に、その受容者を予期してゐる。厳粛な席上にある友人と、寛いだ席における友人とでは、既にその内容を異にしてゐるわけである。話手の側においても、またさうであらう。従って、厳粛な席における両者の関係は、寛いだ席にあるそれと、既に違ったものになってゐる。即ち、違った場において言語行為が営まれるといふことになるのであって、記号的に示すならば、A_1対B_1の関係が、A_2対B_2の関係に変移したといふことが出来るであらう。その場合、席が厳粛であるか寛いであるかは、A若くはBを囲繞する環境であるに止まって、A_1がA_2となら、若くはB_1がB_2となる場とはいひ得るにしても、それは、A_1対B_1が、A_2対B_2に変移する以前の問題であって、A及びB夫々の在り方を決定するにしても、A対Bの関係には、前段階といはなくてはならない。両者を齊しく場面と呼ぶことは正しいとしても、其処には次元の相違があることに注意しなくてはならず、言語行為を規定するものが、AとBとの関係である限り、暫く、これのみを、場と名づけようと思ふ。その場合に、席が厳粛であるかどうかといふことは、B_1若くはB_2の中に、包含吸収せられてしまふのである。

ここでは、場の構造並びにその成立条件について、詳しく述べることは避けて、場に対する概括的な考へ方を示したに過ぎないが、最後に、言語の発想的部面と場との聯関を物語る一例として、「細雪」の一節を考へてみたい。

女学校三年生の悦子が、隣家のドイツ人少女ローゼマリーの、「明後日（みやうごにち）」といふのに対して、「アサッテ」といふことばを使ひ馴れてゐるために、突然にそのやうなことをいはれて、「何のことですか、ルミーさん、そんな日本語ありません。」と否定する場面がある。[一四]

この会話がなされる背景を、我々は理解しなくてはならない。悦子が「ミャウゴニチ」といふ語を知らなかったといってしまへば、それまでであるが、幼い小学生の言語生活は、その属する言語体系の、比較的単一純粋な姿で営まれるので、理解可能の範囲と、日常併用の範囲との不一致は、さほど甚しいとは考へられないから、悦子の生活圏内にあっては、少くとも、口頭会話において、普通、「ミャウゴニチ」とはいはないのであらう。ところが、ローゼマリーは、本来、異質の言語集団に属する外国人であって、場に対する理解が、必ずしも十分ではない。二日後に該当する語が「ミャウゴニチ」であることを知れば、躊躇なく用ゐて憚らないのは当然といへよう。現に、福原麟太郎氏によれば、或る駐日高官が、重大な外交会議の最中に、直面目な顔をして、「あらまあ」といった実例があるさうだから、考へられないことではない。事実、また、我々は、「ミャウゴニチ」を日常会話に用ゐる人を、周囲に知ってゐるのである。[一五]

「アサッテ」と「ミャウゴニチ」と、その志向する素材は同一と考へてよい。而も、両者は、今日の日本語として共存してゐる。それにも拘らず、（といふよりも、同一対象を表はす語が同時に共存し生活することから、むしろ、必然的な結果として、）用ゐられる

場を異にするといふことは、両者が伴ふ雰囲気が、夫々別であることを示す。（「細雪」が創作であることは、この場合、さして問題とはならない。もし、芦屋ことばの実態がさうでないとしても、作者の言語意識として、かやうに識別せられてゐることになるからである。）

その雰囲気が、或る言語集団においては口語の場に相応しいと感得せられ、他の集団にあってはさうでないとせられる。斉しく当該言語集団の主体的選択を出るものではない。即ち、口頭語を規定する条件が、言語の側にあるのではなくて、言語行為者の意識に属することを知るのである。

或る一人の言語生活を観察するときに、彼は決して単一の言語集団に属するのではなくて、歴史的社会的地域的その他各種の複雑な言語社会の重層的均衡の上に立ってゐることがわかる。それが場に即応して、その最も適切な言語体系がクローズ・アップせられるのである。従って、口頭語の認定は、場に即した主体的判断に基いてなされるのであって、言語それ自体の側から見るならば、極めて浮動性に豊んでゐて、これを捕捉することは、むしろ、不可能に庶幾いといふべきであらう。

即ち、それが、口頭語の場において用ゐられるか否かによって、決定することなのである。それは、言語自体が具備する性質ではなくて、言語の雰囲気――言語行為者がその語に如何なる感覚を抱くかによって、附与せられる一種の衣裳にも類したものといへよう。

而して、その感覚が、やはり、流動するのであるから、場において理解する外ないわけである。

これは、主語の類別においてのみ、いはれることではない。言語主体の意図する内容を、言語を通じて汲み取る場合にも、また、考へなければならない事柄である。例へば、謝礼を日本一といへば、日本一の高額であるとも、日本一低額だとも、二つの場合を発想することが出来るが、日本放送協会の人件費のベースが、二万円の高額であることを語り合った後に、

〔杉山〕 額はハッキリ判らないけれども、会長は日本一の月給取りだといわれますね。

といふのを受けて、

〔長野〕 謝礼も日本一。（笑）

とあれば、説明を要せずして、読者にも、十分理解出来る。「謝礼も日本一」といふ表現は、場に依存することによって、その意味を定著し、その機能を果して得てゐることがわかるのである。

（一九五〇・八・一八稿　一九五一・二・一三再訂）

〔註〕

〔一〕 中島文雄、意味論七頁

〔二〕 時枝誠記博士は、従来、研究せられて来た意味の変遷とは、言語の内容であるところの表象或いは概念の拡張・縮少の研究であったといってをられる（国語学原論四〇二頁）が、「カメラ」の場合などは、単なる概念の量的変化ではなくて、正しく、質的な転換をなしてゐると見なくてはならない。

〔三〕 国語学原論、意味論の項参照。

〔四〕 拙稿・王朝語としての「つら」（日本文学研究第七号）

〔五〕 拙稿・語意識の史的変遷に就いて（日本文学研究第十四号）

〔六〕 芸術新潮

〔七〕 吉田精一先生・近代詩（日本文学教養講座Ⅲ）二九七頁
〔八〕 萩原朔太郎集第七巻一八〇頁
〔九〕 沢瀉久孝先生・み山もさやにさやげども（萬葉古径）「視覚」の伴ふことは語源的には認めて、聴覚を主とすると述べてをられる。
〔一〇〕 亀井孝氏・柿本人麿訓詁異見（国語と国文学昭和二十五年三月号）
〔一一〕 シャルル・バイイ、言語活動と生活（岩波文庫一五四頁）
〔一二〕 時枝誠記博士、国語学原論四〇五―六頁
〔一三〕 時枝誠記博士、国語学原四四頁
〔一四〕 谷崎潤一郎氏、細雪中巻一四一頁（縮刷版二二七頁）
〔一五〕 福原麟太郎氏、英語上達の法（文芸春秋昭和二十四年十二月号）
〔一六〕 週刊朝日（一六三〇号）N・H・K のお時間

―大阪市立大学助手―